

北海学園大学（2019年リーグ戦2位）

4連休初日の7月23日、海の日。札幌市清田区の北海学園大学清田グラウンドラグビー場で、北海学園大アメリカンフットボール部の4日間の集中練習がスタートした。高木幸樹コーチ（38）が「競争して勝つ。修正はプレーの前に。質の高い練習をしよう」とハドルで呼びかけ、金色のヘルメットに白のユニホームを着た攻撃チームの選手たちがフィールドに飛び出した。

新型コロナウイルスの感染拡大に伴う道の緊急宣言（2月28日）を受けて、大学が施設の利用禁止とサークル活動の中止を決めたのが3月3日。それから4カ月間の個人練習期間を経て、6月22日に大学がサークル活動の再開手続きを発表した。清田グラウンドなどの施設利用を認めるとともに、練習内容などを書面で申請し、認められた場合に「限定的な活動のみ許可」とした。アメフト部は、検温と体調管理、マスク着用や消毒の徹底などコロナ対策とともに、日本アメリカンフットボール協会が発表した「ガイドライン」に即した練習計画を提出し、7月3日に再開が認められた。

4日に土の上で今季初練習を行い、この日が6回目の練習日。ガイドラインの「フェーズ3」にあたる再開3週目となり、選手43人の全体練習がスタートした。コンタクトはまだ出来ないが、一日も早く体を慣らそうと選手たちはヘルメットとショルダーを着用。パス練習では、2018年道リーグMVPの前谷謙五さんも加わり、4人のQBが北海学園大伝統の長距離弾を次々に、レシーバー陣に投げた。青ユニホームの守備チームも加わった「ウオークスルー」というフォーメーション練習では、ラン、パスプレーの動きを丹念に確認していた。キック、フィールドゴールの練習も行った。

昨秋のリーグ戦で連覇を狙いながら北海道大に敗れ、雪辱を期す今季。5試合を予定した春のオープン戦が中止になるなどチーム作りは始まったばかり。高木ヘッドコーチは「まだ基礎練習ばかり。今はけがをしないことが大事。コロナウイルスで練習中止は、ほかのチームも一緒」と気を引き締める。中断期間中にはOBの紹介でXリーグ選手によるリモート練習も積極的に行った。他チームが苦勞する新人勧誘も、恒例の「履修相談会」を今年リモートで行い、大学生活の助言とともに

アメフトの魅力を新入生にアピール。200人ほどの反響があり、選手11人、スタッフ3人の獲得に結びつけた。

OLのリーダーでもある本間航史主将（4年）は「リーグ戦は全勝優勝。その後の試合もあれば勝つ」と今季の目標を掲げたうえで「準備期間が短いのはみんな一緒。短い期間で選手に勝つ意識を植え付けたい」と意気込む。DLの坂本大弥（4年）も「今年はまだ当たりを増やし、より実戦に近い練習をする」と檄を飛ばす。伝統のパス攻撃の中心になるWR佐藤玲太（3年）は「1年生のときに出場したパインボウルの充実感が忘れられない。後輩たちにもあの感激とフットボールの楽しさを知ってもらいたい」と決意した。



【ヘルメットとショルダーパッドを着けて練習に励む北海学園大アメリカンフットボール部の選手たち】